郷土誌だより いまむら

編集
今村誌編纂委員会
発行
今村誌刊行会
瀬戸市平町3－142
電話（84）0840
コミュニティセンター内

郷土誌をもちたいと願う
今村地区のあゆみ

今は故人となられた、長江鎌次郎、松原寛城、青山政五郎、伊藤浜吉、横山米吉さんたちの発想で郷土誌をつくろうと資料集めがはじめられた。矢野健三連合自治会長の時には、連区費から協力費が計上されて、私たちは郷土誌がもてる日も近いと思った。

編集責任者だった長江鎌次郎さんが亡くなられ、全資料は私の家に運ばれたが、陶生病院を退職された浜吉先生が後を受継いでくださることになり、資料は先生のところへ移した。その後編集のための会合が二・三回もたれたが先生も亡くなられた。

このことを知られた須崎教範小学校長が、郷土誌本を編集中であった小中学校社会科研究会に、なんとかまとめてもらえないかと話しかけられ、資料は須崎校長に届けられた。仕事がはじまる前に須崎校長も尾張旭市に転任となったので、後は村田秀雄先生が受けて、数名の先生方の協力で、本文一四四枚、資料篇七二枚の原稿用紙にまとまった。

とにかく、郷土誌を手にして大竹加三、横山徳一、三宅寛一、桜井教範校長等と話し合い、一部だけでは活用できないので、とりあえず拾部ずつ複写をするとともに内容の不備を追加しようと、那須八郎さんと私が手がけたが、那須さんが病気がちであったので、大竹加三さんに引継がれたが、これからという時に急死されたのでまた足ぶみとなった。

昨年十月、コミュニティづくり（ふるさとづくり）を経験された人々や関心をお持ちの方々の自発的な参加で、新しく再出発となった。この「郷土誌だより」は、参加の輪をひろげること、仕事の推進を役目として、この仕事が終るまで奇数月に発行することになった。

（追分町　青山政信）

古老に聴く
山巡査の話

私自身が既に還暦を過ぎて三年にもなるから、昔流で言うなら老人の類に入るだろうが、我未だ壮年なりの気概でいるのだが、如何なものでしょうか。

私の子供の頃の話ですので、もう半世紀も前のことになるが、今の西山町根之鼻の橋の西に当る山際に、子供達が山巡査の家と呼んでいた駐在所がありました。長いサーベルを腰にした、威厳のある姿のお巡りさんが居られた記憶があったので、この事について古老を訪ねて話をききましたので、次に記してみました。

駐在所があった根之鼻の辺りは、当時村の境界線が明確でなかった故か次の様な事がありました。

八白村と言っていましたが、其の頃此の地点で、山林中で首つりの変死事件がありましたが、その事件の後始末をするのに、村境いの両方の村で、事件の厄介事を自村の事にしたくないということで、相手方にかぶせ合いをしたという事でした。そんな事があったので当時根之鼻の橋から西十五間（約三十米位でしょうか）の地点に、八白村三十六番戸矢野清左右エ門なる人の居宅があったが、そこを村境として取り決めた。

山巡査が駐在した頃は、大正十年前後の頃で、西山町、南山町一帯は山林で、官有林であったが、心なき住民や、他からの侵入者の不心得者による、立木の盗伐採が頻繁にあり、其の被害が相当にあったので、山巡査を配して、保安林の管理に当らせたものだ。

当時附近の住民は、家庭の煮炊きの燃料などとして、松葉の落葉拾い（ゴーカキと呼んでいた）をしたものでした。禁制の官有林なので、主婦たちは、夜明け前まだ暗いうちに、山巡査に見つからんように、南京袋などもって、薪集めをしたものです。

今は、ガスなどによる文化生活になりましたが、当時の住民生活の一端が伺えると思います。一般的に貧しい暮しであったようです。又山巡査なるものは、山口（当時の幡山村）の方にもあった。そちらは陶土の盗堀を防ぐ山管理のため山巡査が配されていた。　以上

お話をされたのは
伊藤藤二さん
伊藤さん自宅にて　横山典次

原稿募集

あなたの原稿をお待ち申上げております。〆切は特に設けませんので気の向いた時気軽に書いて送って下さい。原稿用紙とは限りません有合せの紙で結構です。採否は当方にお任せ下さい。又場合により添削することもあります。ご了承下さい。コミュニティセンターまでどうぞ……

今村という地名のうつりかわり

古い記録によると、今から五百年ぐらい前に、碧海郡今村（現安城市）に住んでいた松原吉之亟が一族とともに西加茂郡の今村（豊田市）に移り、更に尾張国春日井郡横山村に移って今村と改名し、居城を構えたということである。その城址が城屋敷町の八王子神社の境内にある。これより前の古いことはわからないが、松原公以後はこの土地が今村という地名であったことは確かである。

今村という地名の語源を辞書でしらべると、「新たにできた集落」の意味である。また、地名辞典で今村をみると、「安城市の一部都市化の波にさらされ変容が著しい」とある。

とにかくこの土地が今村という地名で、住んでいるものだけでなく他の土地の人々からも今村と呼ばれ、地理院でつくられた地図にも明らかである。それが、明治二十二年の最初の町村合併で、八白村が生まれ東春日井郡八白村大字今村となった。次に明治三十九年の町村合併で、旭村大字今となり、更に大正十四年瀬戸町に合併して瀬戸町大字今となり、瀬戸町の発展とともに新町名の設定で、今村の名は全く消えてしまった。現在今村の名が残っているのは、名鉄バスの「今村停留所」と「今村保育園」の二ケ所だけである。

地名は、外からの事情でかわったが、中味までは大きく変らなかった。しかし、昭和三十年頃から除々に変りはじめ、村社会から都市社会に生れかわってきた。

（平町三　伊藤惣一）

村名	1670年頃			1800年頃		
	戸数	人口	順	戸数	人口	順
今村	30	258		133	654	
美濃之池村	5	26		17	73	
瀬戸村	45	208	5	264	1,271	1
赤津村	170	675	1	229	974	3
上水野村	76	456	2	186	779	4
中水野村	31	227		59	306	
下水野村	29	149		72	307	
本地村	42	243		144	674	
菱野村	55	402	4	129	464	
山口村	52	435	3	228	1,025	2
下品野村	40	280		150	666	5
中品野村	30	204		68	301	
上品野村	30	231		64	366	
白岩村	7	42		15	77	
片草村	12	70		18	90	
上半田川村	19	102		55	239	
下半田川村	32	148		70	141	
沓掛村	30	159		84	309	

都市は村の中から生れた
瀬戸の3百年前は18ケ村

（尾張徇行記から　伊藤惣一）

棟札発見

四月初めに八王子神社の神殿の清掃中十枚程の棟札が見つかった。ほこりだらけで何が書いてあるのかさっぱりわからなかったが、水できれいに洗うと、はっきりと字が見えてきた。

この棟札は昔から神社の改修、新築、寄進する時、村民氏子一同の安穏と幸を祈願した当時の人々の貴重なる文献とも言えるもので一番古いものは延宝八年（一六八〇）徳川綱吉時代から、宝永（一七〇八）、正徳（一七一三）、享保（一七二二）、寛政（一七九〇）、文政（一八二七）、慶応（一八六七）の札書がある。

これを見ると、当時の神主名、庄屋、組頭、大工名等がわかり、なかなか興味がある。

次に三枚書いて参考に供する。

（矢野清次）

（表）
延宝八庚申年
奉寄進　御銖子八王子大明神家内安全所放白
三月拾日奉寄進御立明シ　矢野文右衛門

（裏）
清九郎・又七郎外五一名署名　敬白

（表）
神明宮　神主
白山神　奉修復神殿村中為安全
熊野神社　長岡円大夫政豊

（裏）
文政十年亥九月二八日
春日井郡今村庄屋
鈴木　利兵衛
稲垣　善六
当日酉上刻正迂宮　組頭　鈴木　清七
惣氏子中
大工　青山　清兵衛

（表）

天照大神　素盞嗚尊　寛政二庚戌年　神主長岡朝臣太夫保包　長岡朝臣　今保
春日井郡山田三庄今村氏神八王子大明神奉上造月
庄屋　青山　小右ェ門
組頭　鈴木　林右ェ門
同　青山　彦右ェ門
同　矢野　長兵衛
同　鈴木　利兵衛
金井大明神七月三日吉日
天下泰平五穀成就　正遷宮役掛人数
万豊快楽
村中男女安全息災　長岡円太夫　喜之右ェ門
長久祈願　長岡　勇助　常吉
松岡　大隅　角蔵
長岡数太夫　幸右ェ門
大原　権助　甚助
弥右ェ門
惣助

（裏）

六月十二日
修迂宮役掛人数　御几帳寄付人数
大原円治　幸四郎　青山小右ェ門　矢野利吉
松岡中助　徳蔵　青山彦右ェ門　鈴木利兵衛
定右ェ門　伊藤文之右ェ門　鈴木利平治
助七
甚助
弥右ェ門
惣助

（註）棟札の年代について

○棟札1　延宝八年（一六八〇）
徳川綱吉、五代将軍となる。
生類あわれみの令を出した頃。

○棟札2　文政十年（一八二七）
頼山陽、日本外史をあらわす。

○棟札3　寛政二年（一七九〇）
本居宣長、「古事記伝」をあらわす。
朱子学を保護し異学を禁じた。
（寒山拾得）蕪村ら活躍す。

※今回発見されたもののうち、もっとも古いのが（1）で、三百年前のもの。尚、この註は阿部隆士氏のプリントを参考にしました。

（編集部）

稲垣兼四郎翁のおもかげ

八王子神社の境内の東方に稲垣兼四郎翁の胸像がある。碑文にあるように、瀬戸信用金庫の前身、今村信用購買組合の創立者で元銅像が慶昌院境内にあったものを大平洋戦争の金属供出に応じたために往時の台座に胸像を建てたものである明治四十四年七月信用組合の発起人として自ら組合長となり僅かとて貯金はのちにおくらずに積めば宝の山となるらむをモットーに当時今村の日露戦役終戦後の浮華軽佻の風を戒められ卒先範を示され信用組合の運営をなし経済力の強化をはかられ、買物は明日に今日貯金の貯金袋が各家庭にありました事など皆ご存じの通りでありますが、ここに知られざる事がらを書いて見ましょう。

昭和五、六年の頃稲垣翁は組合長として毎日組合に朝六時頃出勤せられ事務所は今の共栄支店の前の建物であり、腰掛は一米角の木の台に畳をはめこみ弘法サマの台座のようになったものに座ったり掛けたりして見えた。又、茶華道の宗匠でもあり、机の引出しには茶を入れておかれ自費で来客に抹茶などふるまっておられた。

全く無報酬で清廉潔白、祖先崇拝の心あつく常に宗教を信仰せられ往年はよく新開地の説教所に行かれました。自転車にリヤカーを付けたものでよく会場まで送ったものだ。又、自転車に乗ってもらい又運悪く落したこともあった。

翁の自作の仏教いろは歌は有名であり、むつまじく夫婦の仲は暮せども連れてはゆけぬ一人行く旅など私達は今でも覚えています。

組合に用達しに来る人は、翁にはご苦労サマご苦労サマでございますと丁寧に頭を下げて入いる人が多かった。七十七の喜寿の祝には七夕と共に喜ぶ七十七の句もあります。

帳簿など書き直そうとすると、訂正でよい、いくらきたなくても訂正でよい。書き直せばきれいにはなるが、おまえ達の心がきたないぞと言われ、こんこんと悟された事は今でも忘れられない。

名古屋へ出張せられても、和服にハカマをはき、長身の翁は立派であり昼食は八銭の寿司で済まされた程で節約の一端が伺がわれます。

さて胸像の横に七、八米の青桐が天にそびえているが、昔の銅像の前に植えたステッキ位いの苗でありましたもので、当時を偲び、たゞ感慨無量である。

（北脇町　矢野宗治）

この「郷土誌だよりいまむら」は冒頭の記事にもありますように先輩たちの後を継いで地誌編纂という大変な仕事を始めた私たち、何しろ素人ばかりで思うように事が運びません。そこで、広く世間の皆様のお教えを乞い、お知恵を拝借すること、一緒に仕事をして下さる同志を発見したいということ。そして私たちのやっている事を目的として発刊する事にしたものです

追々、仕事の進み具合なども載せていく事になりましょう。

どうか、皆様のご存知の事、古い資料があるぞとか、こんな話を知っているかというような事、或は紙面からの問いかけに対するご返事などどしどしお寄せ下さいますよう、お願い申し上げます。

又、何せ資力もありませんので全戸配布とはまいりませんので、ご入用の方は必要部数を取りまとめお知らせ下されればお届けするようにしたいと思います。連絡先は題字横に書いてありますが、急ぐ時は八二ー四八四七へどうぞ。

✻発刊にあたって✻
編集部からおねがい

旗はどこへ

若葉薫る日曜日、病気療養中の矢野倉二さんをお見舞旁々、平町のお宅を訪ねました。病気も殆ど快復され大変お元気、雑談を交えながら青年時代の想い出を次のようにお話しいただきました。

あれは大正十年頃と思うが川西鵬の青年有志で身心の鍛練と修養を目的に日進クラブという会を作った。塚本徳一さんが会長で会員十二、三名だったと思う。川西の弘法堂を会場とし茶の湯、活花、和歌等先輩の指導で週一回位勉強した。会の基金を作るために土方仕事に行ったこともあった。又当時葉煙草耕作者の総代の役もクラブで引受けて、作付面積、植付本数の調査や生育状況の調べやら、又出荷のときは専売所に出向いて納入品種等級などの検査に立合い売上代金をまとめて受領し、納入者個々に等級金額等明細に精算して分配する等の仕事をした。

話は変るが孫田に山口工業株式会社（通称山美工場といった）という電気の碍子や器具を生産する大きな工場があった。まだその頃そんな品物を見たこともない人が多かったので村の人や学校の子供たちに見せたいと思ってクラブから会社へお願いして沢山製品を借り受けて小学校に陳列して見せたことなど覚えている。又、年に一回敬老の意味で弘法堂にお年寄りを招いて慶昌院の住職の法話をお願いしたり五目飯をご馳走して大変喜ばれた。大正十二年青山東一氏が入営されるについて見送りするのにクラブの旗がほしい。作ろうじゃないかということになり名古屋の旗屋町の店に注文した。約束の日に私が自転車で受取りに行ったがまだ出来上っておらず夕方まで待ってやっと受取って帰ったが余り遅いのでみんなが心配し矢田橋まで自転車で迎えに来てくれたこともあった。又、この年には大きな事故があった。瀬戸電で瀬戸駅から石炭を満載した貨車が暴走して今の青山病院の南の辺で名古屋から来た終電車と正面衝突、満載の石炭が客車に飛び込んでしまったから大変。お客は石炭の下敷、大きな音と悲鳴にちょうどその夜弘法堂にいた会員はクラブの提灯などを持って現場にかけつけ負傷者の救出にあたった。青山祐太郎さんの家の前にむしろを敷いて負傷者を収容、警官の指示に従って負傷者の家への連絡などに活躍し、後に瀬戸電の会社から感謝状と謝礼金を頂いた。今でもあの悲惨な光景が目に浮かぶ。あの時作った日進クラブの旗が今、どこにあるやら知る由もないが何とか見付け出したいと思う。

こんなお話し、筆者も昔を思い浮かべながら懐かしく聞かせて貰いました。矢野さんは旗の見つかることを望んで居られます。当時会員であった方も今はもう故人となられた方が多いが、もしご家族の方でも日進クラブという旗がお目に留まったらコミュニティセンターまでお知らせ頂けると大変嬉しく思います。当時の会員で判っている方は左記のようです。

生存者・矢野倉二、青山寛

物故者（敬称略）塚本秋一、伊藤桂一、大竹善一、青山秋一、青山広一、横山義明、大竹加三、矢野由松、青山太、青山東一、以上。

（田端町・二・青山寛）

連載物語

広長公物語（1）

一、はじめに

高蔵寺の駅から中央線に乗って北上し、木曽谷に入ると、雪をいただいて切り立った様な山が車窓に見え隠れして姿を現す。駒ケ岳である。

北アルプスの雄峯にはかなわぬか、それでも一般の地図には、二九五六メートルと書かれている。

駒ケ岳を頂点として、長野県の中央から南に走り、岐阜県の東部恵那山（二一九〇メートル）あたり迄を木曽山脈というのであるが中央アルプスと云った方がよく通っている様である。

その中央アルプス山系は更に西南に続いて、美濃の国（岐阜県）尾張の国及三河の国（共に愛知県）の三国の国ざかいに位置するので、その名が付けられたと思われる三国山があり、その南に猿投山が続く。山らしきものとしては最終の山として、瀬戸の東端にそびえ立っている。

この三国山と猿投山とがくびれた処に戸越峠があって、尾張と三河をつなぐ道、人馬、車の行交の道として、昔より今に至る迄も変る事はない。

面白い事に春・秋の彼岸の朝六時頃に、その戸越峠より昇る朝日を見る事の出来る処がある。それはこれから述べようとする今村城の楼上から見えたと相像する。

（余談になるが私は彼岸の日の前后に歩いて日出の時間と場所を調べた事があるのでその様に想像する）

いづれにせよ瀬戸に住む人々は戸越峠を中心に三国山と猿投山のどちらかの山から昇るお日様を迎えて生活を続けて来た。現在も、これからも又。

瀬戸の中でもこの朝光を一番先に受ける処が、ここ今村である。

さて「今村」とは!!

現在の長根、效範の二学区は大正末期頃迄凡そ四百五、六十年の間「今村」と云う名前で呼ばれていた地域である。

長い間、受け継がれて来た今村の住民と云う意識は、效範、長根と学区を異にする現在も尚生き続けている。「今村」と云う言葉の中には何か誇らしげなバックボンの様なものを感じ取る事が出来る。

この「今村」の名付親こそここに云う広長公である。正しくは松原下総守広長公と云う。

広長公は、当時三河国碧海郡今村（現在の安城市）に城を構えて住んでいた。故あって（後述）尾張国に潜住し、今から凡そ五二〇年程昔、寛正年間（一四六〇年頃）飽津保上邑より此地に移り、横山村を改め、「今村」と名付けたのがその始りである。